

石で作られた道標はそう大きくもない。高さは人の目線以下のものだ。なぜかと言うと、人が見るものだから目線以上にすると見にくい。

道標を探そうと思えば、探すつもりで気合を入れて見なければ駄目だ。ボーと風景を見ながら道標が目飛び込んでくることはない。道標はその風景に長年馴染んでいて、色も自然な色になっている。現在の青色の交通案内標識の様に目立つ色では決してない。道標のある位置は、現在では道の端に追いやられように電柱や家の塀の隅っこにある。乱暴な車にも耐えるような場所でないとやられてしまう。車がない時代には、もっと前面に出て見やすい所にあったのではないか。

そんな道標も街道歩きをしていると1本、1本と目にしてくる。道標はそれぞれの顔があり、只の案内文字が書かれているのだが味がある。個人が建てたものだから、それぞれの建てられた経緯があるだろうし、庶民が建てたものだからどんな経緯かは古文書みたいなものにはない。多くは建てた者の名前もなく年代も判らないものが多い。だから古い物が価値があるとされるその世界では文化財としては丁寧に扱われなかった。最近やっと素性の判る道標は文化財にもなったりするが、普通は単なる古そうな味のある道端の石造物だ。道案内の役目を終え静かに道端にいる道標だが、スターのように扱われない方がお似合いだ。それだからなお道標がいとおいしいものに思える。

道標探しは誰でも出来る。道端にあるので拝観料を払うこともいないし、定休日もないのでいつでも探しにいく。道標は道案内なので、別れ道とか交差点とかに当時はあったのだが、現在もそこにあることはまずない。道の拡幅工事で何処かに動いている。近くにある場合もあるが、電柱の後ろ程度ならいいのだが、家の生垣の中、あるいは家の庭の中、少し離れて近くの神社・お寺・集会所など移転先も多い。移動したのが最近なら聞きも出来るが、だいぶ時間が経ったものが多い。昔あったのが判っていれば探しようもあるが、昔あったかどうか判らないものが多い。

しかし、道標は他の文化財にはない強い味方があった。道標は誰にでも見られるものだから、道標に関心のある人、特に地元の人が熱心に探していて、それを丁寧に記録している。町の一般的な本にはないが、地域の図書館や資料館などでは町の歴史家が頑張っている。その記録を探して、次に道標を探すのが一番の探し方だと思う。